

〔目的〕日本ではドローイングによる婦人用上半身原型は様々な製図法で教授されている。胸度式割り出し法や短寸式製図法等、製図方法の種類も多く、これまでに製図方法や着用官能検査による研究がなされている。和裁から洋裁への移行期に男子服や子供服に比べ一般的洋装化の遅かった婦人服の婦人用上半身原型が、どの様に一般の人に教授されてきたのか調べるために、明治時代から昭和20年までの間に出版された裁縫関係の書籍を調査した。

〔方法〕対象は、明治時代から昭和20年までの間に出版された「裁縫」「洋裁」「洋服」「婦人服」「子供服」「裁断」などのキーワードをタイトルにした書籍と、「原型」「元型」「割り出し」「寸法」「製図」等の記述のある書籍から婦人用・子供用上半身原型の製図方法を調査した。

〔結果〕子供用上半身原型の方が婦人用より早く明治末期に既に記述されている。昭和初期には婦人用と子供用の兼用の例がみられる。製図法には計測項目の胸囲と背丈を用いて描く胸度式と、計測項目の3～5項目で描く短寸式に近いものがほぼ同数の記述がなされている。また、現在ではほとんどみられない前中心線上半分を傾斜させて胸ぐせ処理をした原型が昭和20年頃までかなり多くみられる。大正時代までは背丈の意味が一定しておらず後身頃の頸側点に相当する位置から下に測られているものが多い。後襟ぐりの深さはほとんどがそれぞれ独自の定寸法を用いており、製図上では割り出しによるものは少ない。この時期には一般の読者にできるだけ描きやすい製図の工夫をしているのが読み取れる。